

## 「立ち止まる」

東京都 小金井市立小金井第二中学校 2年  
熊谷 瑞生（くまがい みずき）

「右目の視力が低く、内斜視になっています。けれどまだ成長段階ですから、メガネで矯正できますよ」

眼科医からそう告げられた時、僕は5歳で「斜視」の意味も分からず、母から与えられたメガネを新しいオモチャでももらったように、喜んで掛けていた。

問題は小学校2年の時に起こった。

校庭で遊んでいると中学年の男子生徒が数人近寄って来て、突然僕のメガネを取り上げると、宙に投げるようにパスを繰り返し、返してくれなかったのだ。そして最後に受け取った男子生徒が地面にメガネを叩き付けた。

メガネは、弦の部分が曲がり、レンズも外れて転がっていた。何が起きたのかわからなかった。

壊れたメガネをティッシュに包み、家に持ち帰って母に渡したとき、理由を聞かれたが本当のことを言えず、友達と遊んでいて壊してしまったと嘘をついた。

それからも中学年は、僕をみつける度、メガネを取り上げたり、頭をこづいたり、いきなり突き飛ばしたり、ことあるごとに嫌がらせをした。それを見ていたクラスメートも、だんだん面白がるようになり、誰かが僕のことをある名前で呼び始めた。

「メガネ猿」

クラスメートのからかいが増すごとに酷くなり、僕は学校に行くのが怖くなった。

ある日、母が仕事に出た後を見計らい、ランドセルを背負ったまま家に帰ると自分の部屋にこもった。

どうして、こんなことになったのだろう。メガネをしているから？僕が「斜視」で顔が変だから？胸の奥が熱くなり、鉛のような重いものがせり上げてきた。

その日、登校してこない僕を心配して、担任の先生が家に来てインターホンを鳴らし続けた。2月の寒い日で、風が冷たく、雨も降っていた。それでも先生は何どもインターホンを鳴らし続けた。連絡を受けた母も会社を早退して帰って来て、先生と一緒に家の扉を開けた。僕をみつけた先生は「よかった。家にいてくれて。事故にあったか、悪い人に連れていかれたかと思ったよ。明日は学校にちゃんと登校してね」と優しく笑った。

先生は一言も僕を責めたりしなかった。

あくる日、先生から学校に行かなかった理由を尋ねられ、僕は本当のことを話した。

「メガネ猿」と毎日友達からからかわれるのが辛かったこと。中学年の男子生徒が怖かったこと。話終わると、あのせり上げていた鉛の塊が、僕の口から、転がり落ちた気がした。

「僕がメガネをかけているから、変だから、みんなが意地悪をするのですよね」すると先生は、頬を紅潮させて言った。「違うよ。瑞生君は何も悪くない。人と違うところがあっても何も悪くない。メガネをからかう友達がいけないんだよ。」

先生の言葉を聞いた時、何故だか前がくもって見えなくなった。レンズには僕の涙がいくつも付いていた。

今の僕なら「メガネ猿」と呼ばれても、聞き流せるし、猿の真似くらいして相手を笑わせることもできる。

時々、「そんなことくらいで傷ついてどうするの。もっと辛いことをされたり、言われたりする人がこの世には大勢いるんだよ」と言う人がいるが、僕は違うと思う。人の心の痛みは他人と比べることが出来ない絶対的なものだ。その人が辛いと感じるなら、心のバケツが一杯になってしまっているのだから、より大きなバケツになるには、その人のこれからの経験が心の筋肉を強くするまで、時間がかかるものだと思う。

言葉は、時にその人の心を深く傷つける。特に人と違う点や、人とは劣っていると知っていることを、何度も繰り返し集団の中で言われているうちに、傷は深く、深くなる。

言葉とは、他人にものを伝える上で大切な手段にも関わらず、何も考えずに発した一言で相手の胸の中に冷たく重い鉛の塊をも作り出してしまうほど、猛毒になり得るのだ。

一方で、言葉は他人を救う暖かい毛布にもなる。

あの時先生が「瑞生君は何も悪くない」と言ってくれた言葉は、僕の胸に詰まった重く冷たい塊を少しずつ溶かしてくれた。

14歳になって僕は思う。人と話す時、一度「立ち止まろう」と。これから僕が相手に言う言葉は毒になってしまわないか、それともほんの少しでも相手の気持ちを和らげたり、楽しくさせたりできるだろうか。毛布のような言葉で、相手の冷え切った感情を温めてあげることができるだろうか。

僕は立ち止まって、一呼吸おき、今日も友人や家族と言葉を通して、強くて優しい結びつきを築けていけたらと思う。